野田宇太郎文学散歩

第12巻

文一総合出版

著者略歴　明治42年（1909）10月，福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念，久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』，つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり，以後，著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他，全詩集『夜の蜩』，近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』，木下杢太郎研究『きしのあかしや』，近代詩史『詩人と詩集』，キリシタン史『少年使節』，紀行随筆『日本の旅路』，戦中記録『灰の季節』，戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年，第1回九州文学賞(詩)受賞，昭和50（1975）年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52（1977）年，第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩　12
東海文学散歩　海道篇 下

昭和53年7月10日　初版第1刷発行

著　者　野田宇太郎
発行者　佐藤　弘一
発行所　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　振替東京2-42149

©1978
0395-90112-7354　印刷・製本　奥村印刷
定価は，函・帯に表示してあります。

目

次

知多半島

半田　二
知多と真珠　衣浦と酒の町　「亀甲鶴」の世界　美濃半薬局　風葉文学碑　貝殻詩碑

師崎　三〇
師崎街道　風葉と延命寺　廣津柳浪と海浜院　羽豆岬にて

知多西岸　三三
須佐の入江　内海にて　日本語初訳聖書の碑　漂流
良参寺にて　野間大坊　義朝の最期　伝説　大御堂寺
土産　常滑にて

名古屋

名古屋　三五
金の鯱鉾　尾張と熱田　熱田の芭蕉　林桐葉宅址　宮

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

の渡し常夜灯の下で　母情の橋　白鳥と山桜の歌　熱田前新田にて　津金胤臣の墓　鳴海と芭蕉　千鳥塚にて笠寺観音　逍遙遺宅　二葉亭と逍遙—洋学校跡にて「故郷」と帰省—御園座　堀川と得月楼　名古屋に於ける太田正雄　名古屋大学医学部にて　伊藤圭介の生涯　伊藤圭介生誕地　長英と圭介　長英隠棲の家　芭蕉の『冬の日』とテレビ塔

伊勢路と志摩

桑名　一九七
水郷の城下町　住吉浦にて　船津屋にて　城址と宗社
名残りの町
松阪　二二七
伊勢路　鈴の音　城のある町　魚町一丁目　鈴屋遺宅　山室山

伊勢　二三七
伊勢詣　五十鈴川のほとり　西行と芭蕉　伊勢とギリシア　二見浦にて　伊勢の古市
志摩　二六六
「はしりがね」と真珠　漂泊の詩人、清白　小浜診療所と伊良子清白　安乗にて　志摩の真珠　清白の墓をたずねて

＊別刷写真はすべて著者の記録撮影で本文と共に無断使用を禁じます。

東海文学散歩　海道篇下　おぼえがき

東海地方に限らず日本全土の開発や都市改造、自動車道路開鑿等による自然破壊、歴史的風土の変貌は相変らず激しい。本書は『東海文学散歩』海道篇上に続いて愛知県の知多半島から名古屋の全市域を歩き、三重県に入って伊勢湾沿岸を桑名、津、松阪を経て伊勢を訪れ、最後に志摩半島を巡った文学踏査の記録だが、その執筆時期は昭和三十九年秋から四十年早春である。当然のことながら昭和五十三年現在に至る約十三年餘の間には部分的に変化も多く、例えば本書執筆までは名古屋市中村区広井町の一角に史跡にまで指定されていた坪内逍遙の故家や、一宮市木曽川べりの高野長英隠棲の家などは、その後数年ならずして突然姿を消してしまった。それは日本人の文化意識の欠如によることはもちろんだが、わたくしとしては、本書で出来るだけ原型或いはそれに近い姿を記録し得たことに微妙な安堵の思いを嚙みしめている。そのほか本書執筆後の変化を再踏査したもののうち、必要と思われる部分には註記を補して将来の読者のためにもいささか配慮した。

（著者）

東海文学散歩　海道篇　下

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

知多半島

半田

知多と真珠

愛知県の形は、太平洋に向ってじっと獲物を待ち構えている大蟹のようで、その怪異な様相は神話的とさえ思われる。大蟹のたくましい二本の前肢に当るのが、東側に突き出た渥美半島と、西側の知多半島だが、そうとわたくしが気付いたのは、知多の旅にかかって先ず半田を訪れようとするときである。

知多半島の歴史は古く、多彩だ。古代の知多の中心となっていたのは、『和名抄』にある「智多郡、英比郷（あくひごう）」であろう。英比郷は尾張の国と三河の国とを隔てた境川から、現在の半田市附近の知多半島東部一帯で、その中心は現在の阿久比町附近だとされている。阿久比町には阿久比神社という古社がある。

「知多」の文字がはじめて歴史に顕われるのは『古事記』（中巻）の知多臣の名である。知多臣の祖は天押帯日子命で、天押帯は「葛城の掖上宮に坐しまして、天下治しめし」た御眞津日子訶恵志泥命の子で、またその母は「尾張連の祖、奥津餘曾の妹、名は餘曾多本毘賣命」であった。知多臣の祖母が尾張連の妹であったということは、尾張の国の知多が古代日本でも早くからひらけた土地であることを暗示するものではあるまいか。この知多臣によってはじめて統治された地域が知多郡であった。その古代の中心地阿久比（英比）に祀る阿久比神社の祭神は知多臣の祖、天押帯日子命であろうとは、歴史学者たちの共通した見解のようである。……

半田市を訪れようとして、わたくしが以上のようなことを考えはじめたのは、半田市街を貫流して衣浦湾に注ぐ阿久比川のことを知り、阿久比という古代的地名にふと興味を唆られたからであった。それに関する書物をいろいろ調べてみると、阿久比はまた阿古屋貝の阿古屋にあたると知った。アグヒがアコヤに転訛したもので、阿古屋貝はいうまでもなく真珠の母貝である。

元応二年（一三二〇）の『続千載和歌集』や延文四年（正平十四年、一三五九）の『新千載和歌集』の中に「ころものうら」の歌がみえる。「ころものうら」は知多湾の古名でもあるが、主として現在の半田港のある衣浦港のことである。

わが恋のころもの浦の玉ならば顕れぬとも嬉しからまし　（続千載・富家入道）

顕れぬ衣のうらの玉がしはいかなるえにか沈みそめけむ　（新千載・寂眞法師）

波かくる衣のうらをきてみればもに顕れて玉ぞよりける　（新千載・法印盛運）

衣の浦を衣服の裏にかけて玉と結び、その玉をまことの恋とか真心などの隠喩とした古歌は、このほかにもまだ多い。寂眞法師の歌にある「衣のうらの玉がしは」の「かしは」というのは貝の名で『日本山海名物図会』（宝暦年間）には「あこや貝、あこやト云ヘルハ、所ノ名ニシテ、尾張国、知多郡ニアリ、波間かしはト云フ貝ヨリ採ル」とある。

真珠のことを阿古屋玉というのもこれで解る。この阿古屋玉こそ半田市を振り出しに知多の旅に就こうとするわたくしへの、思いもかけぬ古典の餞（はなむけ）だった。

衣浦と酒の町

知多半島に保命酒と称した酒造りがはじまったのは貞享元年（一六八四）と伝えられる。その後元禄十年（一六九七）には尾張藩に酒株（さけかぶ）の制度が設けられて酒の濫造が禁止され、気候風土と水質が醸造に適している亀崎、半田、成岩、野間、小鈴谷（こすがい）、西浦、大野などの知多の各地が、酒株による公認の醸造地として栄えるようになった。その頃は種麹の製法も進歩して酒質もよくなり、灘や伊丹の関西の銘酒に拮抗して中国銘酒とか知多酒と称され、販路も尾張を中心に主として関東方面にひろがってゆき、江戸新川の酒市場を風靡するほどになった。その知多酒の中心地として、輸出港として繁栄

したのが半田であった。

江戸の著名な戯作者で『東海道中漆栗毛』などの著者として高名だった十返舎一九も、半田には心をひかれていたとみえて、「半田の里の記」という短文を書きつけた大形の扇面が今も半田に残っている。

知多の郡（コホリ）の東なる半田の里は賑はひを見て道の記にかいつけんと、此地名のもとづく処をある儒士にとひければ、半は繁なり、だは駄なり、産物の酒に木綿に数おほきをいふとなり。またみくに学びの高（カウ）しに尋ねたれば、半田は喰田（ハムダ）なるべし、田の稲のさはなるをいふと。又是を仏学（ホトケ）者にとへば、此さとは風雅に富める人其数また無量也、是いづれか才智の少しとせん、梵語に智恵を般若といへばいにしへは「はんにや」のさとと呼びけむもしるべからずと。いづれにまれ此さと地味肥て稲の実入も他にことにしていとめでたきをことぶきて、

般若てふみのりの稲ぞ尊けれ
そらふ穂なみも風にはらみつ
かたよらぬ半田の里の富ぞしる
賑はひを目にみつの教へに

東武　十返舎一九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo